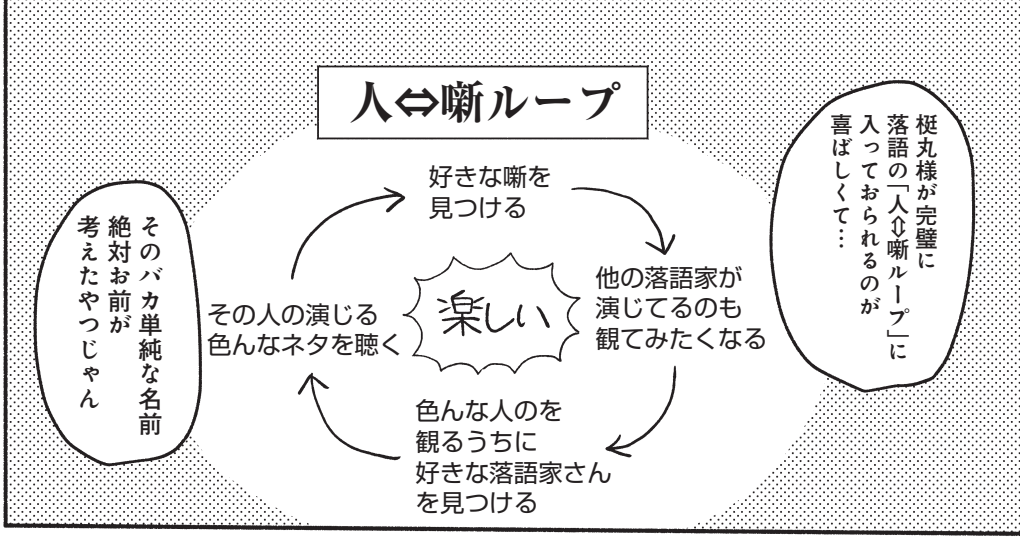

※春米屋…お米を精米して売るお店

お恥ずかしい話なんでございますが…

この前人形町へおつかいに行った時

絵草紙屋に人だかりがあったから気になって見に行ってみたんです

?

※絵草紙屋…絵草紙（挿絵入りの本）や錦絵など、娯楽的な本を出版・販売するお店

そしたら女の人の錦絵が飾ってあったんですが

姿海老屋 幾代

この世のものとは思えないほど綺麗な人で……

これが今吉原で評判の幾代太夫かあ

吉原へ行けばこの人に会えるんですか？

プッ

あはは！馬鹿な事言うな

こういうのは大名道具といって大名やお大尽じゃないと相手にしてくれないんだ

俺たちみたいな庶民はこうして錦絵を見るしかできないよ

恋患い…

それで、あの人には会えないんだと思うと身体に力が入らなくなって…

清蔵、それは銭の無え奴らが負け惜しみ言ってるだけだ

え？

狭いながらも楽しい？長屋

とにかく長屋は狭かった！

落語に登場する貧乏長屋は、俗に「九尺二間」。二間といっても部屋が2つあるわけではなく、これは「くしゃくにけん」と読み、間口が「九尺」でおよそ2・7m、奥行きが「二間」でおよそ3・6m。およそ10平米ということですから、これはかなり狭いわけです。入り口は土間で、玄関と簡単な台所を兼ねています。

政助さんちを訪ねてみると

左上の写真は、深川江戸資料館の再現長屋の一軒、アサリやシジミの剥き身などを商う棒手振り（天秤棒を担いで売り歩く）政助さん（独身22歳）の部屋。畳を敷く余裕などもちろんないので、筵（むしろ）が2枚、わびしく敷いてあります。

商売道具も室内に放置…。押入れもないので、布団の類いは大風呂敷で包んで部屋の隅に片付けておきます。

左は三味線のお師匠さん、「おしづ」さんの長火鉢。こちらの部屋の中には畳が敷き詰めてあり、政助さんよりは豊かな暮らしぶり。

奥に見えるのは、高価なろうそく代わり、行灯（あんどん）の火皿に油を入れて灯芯に火をつけます。菜種油は高いので、主に魚からとった油を使用。ただ、値段は安いけれど、煙が出たり臭ったり、積極的に使いたくはない油だったようです。

江戸の基本は、明るくなれば起きて働く、暗くなれば寝る、雨の日は家にいる。とにかく省エネが基本でした。

雨が降ったらできるだけ外出しない。どうしても出かける必要があれば、蓑笠や番傘を利用。

※本書 P.149 ～ 153 にて詳しく紹介